

「よい音」とは

編集委員 大林 國彦

「よい音」の評価基準は何か

俗に言う、「いい耳をしている」とか、「繊細な耳をもっている」等、オーディオ愛好家への総称として良く使われる常用化された言葉である。

人間の聴覚は、障害のある人を除けば一般的には一様であって、その差は殆ど無いと思ってよいと思う。

「いい耳」として評価されている人達との差異の部分は「音」に関する感性の差にあると考えて差し支えない。この感性とは「音」に対して興味を持ち、常に各種の「音」を体験して学習し感覚・知覚を進化させていることを言っているのである。

ここで、聴覚に関して、ヘッドフォン・ステレオや車載機器等の大音量での聴取に起因すると言われる難聴現象の増加が懸念され、杞憂すべきこれらの現象にも注目を要すると思われる。このような人達の中には難聴障害を生じており、「いい耳」の評価とは相対しない領域のものようである。

即ち、「いい耳」とは健康的で「音」の感性の高い聴覚を有し、常に体験・経験等の学習で変化しながら、「音」の感性と知覚を高揚させているものと言えるようである。

よい音とは

音楽は空間の空気振動として伝わる音波を聴取するものであり、ここで言う音質とは、空間に放出された音波を伝導する空気振動を聴取したものを評価することを前提として考察するものであって、音源である音響変換機の振動板が鼓膜に接近した、極めて狭い耳道内での空気振動を聴取する代表的なインナー型等のヘッドフォンの音質の評価と混同すると、全く異にした結果を招く懸念もあり、ここでは除外して考えることにしたい。

「よい音」とは、一般的な広帯域感と平坦性、レンジ（周波数帯域）感などに代表される物理的再生系の基本要素が再現できれば様に「よい音」に感じられるが、音質を決定する要素がそれ以外に多く存在し、その人（評価者）がその時の感性に順応した、又は期待した「音」を評価基準として、再生音で感じられる音質評価を左右するものとする。

「よい音」とは、その人（評価者）の音の感性に合致した音が再生できれば「よい音」であって、そこには第三者の介入は不要の領域であると考えられている。従って、音質の良さは人によって認知の差があり、同一音源の再生音質が千差万別な音で聴かれているようである。

この評価要素は、専門誌等に掲載のオーディオ機器の評価記事にも劣悪でない限り、良悪の断定的な用語は使われておらず、評価音源を試聴した例として、楽器類やボーカル等の再生状態やホールの響きなど、興味をもつ読者にとって参考となる、概ね、試聴結果の感想的表現が多用されていることを見ても理解できると思う。

学習で得た「音」に関する感性が「よい音」の尺度となる要素が多々存在してくることから、厳密に言えば、音質に関しての評価基準には定説はなく、個人的な感性による基準が底流に存在する主観的な評価基準となるのが普通となることから、「よい音」の基準が個人的にも差があり、結果的に、千差万別であると解釈ができ、一つの音楽が多種多様の「音」で再生されていると言っても過言ではない所以がそこに存在することに気付かれると思う。

感性を高める

障害をもつ人を除けば、聴覚能力の差は生じないはずであることは前述した通りである。聴覚の差異

は生活習慣や生活環境などで生じてくるものであり、音に興味を持つと無意識的にその進化は著しく増大し顕著な変化が見られるものである。例えば、楽器演奏に興味を持つと、絶対音階まで理解できる聴覚に進展するし、音楽鑑賞の機会が増えると、各楽器の鳴り方や響きに関心が高まってくる、これが感性であり、再生音質に求める基準となり目標となる。

音楽を鑑賞し学習を重ねると自然的に「音」の感性を高めていると、年齢による聴覚の衰えも軽微であることが実証されている。普通、高齢化による聴覚の変化は、周波数帯域が狭くなり、20数Hz付近以下の低音域や15,000Hz付近以上高音域の聴取が困難となる避け難い老化現象が顕著に現れるとされている。

音楽鑑賞に興味をもち、音楽を鑑賞する環境で過ごしてきた年配の人達は、20kHz以上の超高音域が楽器の高調波や倍音に与える影響や効用を学習によって熟知されていることから、SACDを再生してターンオーバー周波数が15,000Hz付近のスーパー・ツイータの設置に伴うチューニングに取り組んでいる人達を多く存在しているのも事実であり、超高音域の聴取が無理でも、この周波数帯域が楽器演奏に出てくる影響を学習によって知っており、再生音質の変化を聴きわけているのである。

当然のことながら、その人達は洗練された高い感性の持主で、再生音質の狙いを明確に持っており、日々オーディオ機器の改善に取り組んでいる姿は見逃すことが出来ない事実でもある。

「よい音」を体験する

オーディオを楽しむ場合、誰も初めから完成した「よい音」が再生できる装置に至っていない。いずれ、不満要素の発覚を促す感性が高まり、より「よい音」への改善に取り組むことになるのである。

「よい音」の感性を磨く場として、各種のコンサートでの体験、販売店頭やA&Vフェスタ等の展示会での各社商品のデモ、知人や愛好者達との情報交

換など、可能な限り多くの場での体験と経験が不可欠であると考えている。このような場を通じて、自分の再生音質との違いや、鳴っている楽器の音色や響きの差異を徐々に発見することができ、これが感性となって自己の音質評価基準となり要望へと変化して行くのである。コンサートの体験、店頭での試聴、知人やオーディオ仲間との試聴や、情報交換の体験などの繰り返し学習である。

高音質の再生を目指して、高価な機材を揃える必要性や、防音処理などの音響設計を施したりリスニング・ルームの建設も優先するものではない。

これらは、究極の音を求めたり、専用のリスニング・ルームを考える以外には優先しないと考えて取り組む必要がある。家庭の団樂の場であるリビング・ルームでもよし、書斎でも可であり、かなりの再生品質まで追い込むことが可能であるので、是非、取り組んで欲しいと思っている。



軽井沢アトリウムでの筆者